

第5回 大政奉還建白書の描いた未来

文：京都国立博物館学芸部上席研究員 宮川禎一

150年も前の「大政奉還」などは遠い昔の話に思えるかも知れないが「現代の日本人はこの大政奉還建白書が描いた未来に棲んでいるのだ」と聞くとどうであろうか？まずは建白書に書かれた八条の基本方針を現代語風にしたものを読んでほしい。

- 1、天下の大政を議定する全権は朝廷にあり、皇国の制度法則の一切万機は必ず京都の議政所から出るべきである。
- 2、議政所を上下に分ち、議員は選挙によって選ぶ。
- 3、長幼の学校を設けて教育を施す。
- 4、外国との条約は兵庫で新たな条約を結び、誠実に履行する。
- 5、海軍・陸軍は重要であり、京都・大坂に軍局を置いて親兵となす。
- 6、古来の旧弊を改新し、大根基を建てる。
- 7、朝廷の制度法則を現代に合うように改革する。
- 8、これらの議事に係る者は私心を捨て、公平に基づき、術策を設けず、正直を旨として、実りある議論をすべきである。

1は日本国家の主権は朝廷にあって、制度法律の一切は京都の議政所（国会）から出るべきだということ。2は上院（公家・大名）と下院（選挙で選出された議員）からなる上下二院制議会とすること。これは英国議会制度の模倣である。3は青少年に学校教育を施すこと。これは坂本龍馬の「新政府綱領八策」にはなかったことが注目される。4は幕府が外国と結んだ条約を見直し、兵庫で新たな条約を結んで誠実に履行すること（攘夷ではなく開国和親）。5は海軍と陸軍の充実。6は国家システムの根本改革。7は旧来の朝廷制度を改めること。8はこの改革の議論に参加するものは私心を捨て、公平で正直であるべきという心得。

現代のわれわれがごく当然だと思っている選挙や国会のシステムも150年前の「大政奉還建白書」にその起源があるのだ。そこに示された理念は今に受け継がれ、現代日本の骨格を成しているのである。歴史が重要だということである。